

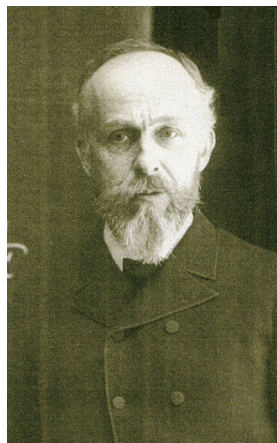
## モースと文字焼<sup>もじやき</sup>

——子どもたちの喜び

文字焼は江戸時代から見られる菓子で、鉄板の上に小麦粉などの生地で字や絵を書いて焼き上げるものです。「杓子<sup>しやくし</sup>程筆では書けぬ文字焼屋」の川柳があるように腕の良い職人もおり、明治時代には東京・神田に、まるで写真画のような文字焼を焼く女性名人がいた、という記録も残っています。一方、駄菓子屋の店先では、客である子どもたちに焼かせていました。

明治十年（一八七七）に來日し、大森貝塚を発見したことで知られるエドワード・モース（一八三八～一九二五）が、この文字焼について記録しています。寺へ通じる道の途中に立った「戸外パン焼場」（屋台のこと）で、子どもたちがコップに入った、米の粉（あるいは小麦粉・卵・砂糖を混ぜた生地）を買い、巨大な傘の下に置かれた「ストーヴ」で、それを焼くのです。ブリキのさじを使い「少しずつストーヴの上にひろげて料理し、出来上ると掻き取って自分が食べたり、小さな友人達にやったり、背中にくっついてゐる赤坊に食わせたり」するのはどんなに楽しかったことでしょう。

モースは、「薑<sup>しょうが</sup>パン<sup>なまこ</sup>かお菓子をつくった後の容器から、ナイフで生麴<sup>なまこ</sup>の幾滴かをすくい出し、そ



モース



文字焼

れを熱いストーヴの上に押しつけて、小さなお菓子をつくることの愉快さを思い出す人は、これ等の日本人の子供達のように心から理解することが出来るであろう」と書いています。彼も幼い頃アメリカの自宅で、菓子やパンを焼いた思い出があったのでしょうか。国籍や時代の違いを越えて、小さな子どもたちの「よろこびよう」に共感するモースと同じ思いを、読者ももつのではないのでしょうか。

モースは動物学者ではありませんでしたが、日本の風俗に深い関心を示し、日本研究者としても名を成しました。日本人にとつては当たり前過ぎて、そのまま忘れ去られたであろう様々な事柄を、得意のスケッチとともに書き留めた多くの記録は、明治時代初期の貴重な風俗誌となっています。

なお、モースは文章と絵の記録にとどまらず、膨大な物品を収集しました。彼が故国に持ち帰った民俗資料類はピーボディー・エセックス博物館に保管されていますが、コレクションの中には鰹節や海苔、寒天ほか、食品の実物が含まれ、缶入りの羊羹や瓶詰めされた金平糖、京都の干菓子なども今に伝えられています。